

135  
4  
509

新編 日本書紀 卷之四  
大和天皇 御宇 乙未年 庚申年

新編 日本書紀 卷之四

1644

No 9036

古今より歌のつせいのまゝに

皇大御國の天神の御子のほごく神ながら天下を知召して古よりいごじき祝もあかり

れば言ひのをへじめすべの風俗うけりのはれるはしは勢のりたりよとに天神の授給へ

る神性の直く正しきをもちて教とするよとのいとくうるのしきを世下りてのりあるは

ぞ我がこくよぶりあるとえ辨へぬ人もそまよりこれこの歌のつせは古事記日本紀万葉集と

くこの書のあかよりぬき出てこれぞこのつくりぶらふことさうらふかへんしめんを

てのしとさにあんまた長歌のすべてをあげざるもありその本は書によりてそれ委きをばり

たかひんくしぞ



藤井稜威

あふやしえをよめを  
あなにやしえをよめを

この二柱の大御歌の伊邪嘉岐伊邪嘉命のいともかしこき御唱言にて二柱のくちぎり給ふ  
みよりに御名にもあつしこたうけし世はひくけ来にまりかく心をわのし左右の差別を正  
くし内外の持別を明ふせさればいひの事をもしうへき世に夫婦のちぎりばりやとよま  
ものゝあれば其のやとよまはことに重みすべしことあり天の御柱をまたてやひろ殿をまた  
て、其御柱を行ゆぐもあひ給るはよに傳れるのやとよまと云ものゝつじめとや云ましかくて  
こと初めの時にわやわとを正しく爲たまひ御唱言といひし給るの實に天地の限り万世に動  
きなきかじこま敷ふせん有る古を知らぬさうしら人の所習野蠻より出たる世あり上代

たの禮敬の道さしあど脱いといさつかあし心真直に神習はん人はかへすぐこの尊くめでた  
き御のはし言をかしてみ奉るむきことにあむ

やくもたけいづも八重垣はまごみふやへ垣はくるそのやへがさを  
こはやくまさ入彦はやあのがを、盗みしせむと後後戸よいゆきたがひ前は戸よい行たがひう  
うはくしらこまさ入彦はや

世ふはらへの功ばかりいよじきものゝなし此は桂巻もかしこき神御祖伊邪嘉岐大神乃はじ  
めを起し給ひ天は日嗣の大と稱さ、もふ天下に傳來になり須佐之男命のあが心すがくし  
と宣ひしあとの出雲國の地名にのこりぬ外國にもこれふ似たることあるははるのよとが大  
神のたすもいひて下れることなき後世にありて彼人の後言するはいとばかりかあし八重垣の

御歌のこのまきの歌のはじめとすひんごのまきのはのり武き御にもあはれとあもほしん又御  
心の雅座に坐ることいと尊じ神習ふ人の朝夕によくなれるは神の御願もことよましなんも  
ろどこのやの歌は御歌よごへ祭神を稱へまはれるはのり皇祖大神を敬ひ給ひたれば皇神の  
御願もことにてかゝる御しるじもあやうくし深く心をまてして常におぼるまじき事にあん  
この御酒はわが御酒あらすくじの神常世にいます石立す少御神の神ほご毒くるはじ豊ほごほ  
ごもまほしきつりこし御酒ぞあすかせん  
この御酒をかぎくむ人々そのはくみ日たてうたひつ、醸なれかも舞つ、醸なれかも此御  
酒のまきのあやうたぬし  
世中にあるものは何一のも神のたまものにあらざるなりを皇祖大神の大御功をもちよけ

て諸神の其事々に御靈幸ひ給ふなりともくかじこきことにて遠つ祖の昔より生の子の末  
々まで盡せざる御願なればものくひものきることにてこの大御歌を唱へ奉りてよろこび樂み  
ておだひらいたらくべきことにてことあらんその身も平らけく常にすこやかなるらんか  
し  
あさかろ大宝屋ふ人さへにき入をり人さへにいりをもとまつくし久米のこらがくぶは  
らしつゝらもち打てしやまむ  
あほまへ小前すくねがわあまをかげかくよりこね雨たらやむむ  
神に仕へ君につかへてあらん人は事にあたり勇氣たゆまずばその功もたちあんのし狂く  
らまじへばこそその事もなりませぬ我皇祖大神の道にあまて武さばかり身まじきまの

たらん人のことに其心はつこきあらばやうもふき「朽心名を耻てをしみて勇たたるよし  
 武雄の命をさしむる」「山行は尊むすかばね海もかば水つくかはねと云はもの、いふに  
 へれたり桂巻もかしこき天照大御神の大御よそひ又息長足姫 大后のかしこきと業とうけ  
 たまはりての婦女ありとて事と時とにとりては武き心をふり起さん況てやますらをといふ  
 名にも耻ざらめやはおほまへの大御歌の尊き御すがたもて遙に軍人の御先に立坐るさまあ  
 りかくてことよく國の内をしつめ給へれ必荒ふる人もおぢりしことていかでかけしきひま  
 を振まふべき

こつくし久米の子らが垣本に植しはじかみくちひいく我の足すれじ打てしやまむ  
 こつくしくめの子らがめはふにはかこら「本とねがもことねめつなごて打てしやまむ

御兄命のときさひたやくしおはして吾の日神の御子にして日に向ひて戦ふこと良はず故  
 にやつこが痛手をなまぬひはる今よりはも行回りて日を背おひてこと撃てめとぢぢりてこ  
 とくは仇を討むとむとし給ひし陰もあくともみに神懸まじたるが其悔しさに男建びましけ  
 ることこの地の名に残りて二千五百年の後に至りても孰か其うらみあかるべき況てこのかみ  
 目のあたり見そおはしし天皇の大御心いばかりありんこの天皇後の世まで大御名もこ  
 とに高くましまし初國知召て武く雄々しく坐るは古今にわたりて大方世にあらへ奉らん君  
 もあらひ奉らん臣もささくあかりんこのこつくしの二御歌の御兄君の御仇を報い給  
 ると天下を平らげ給ふ御業を遂させ給んとするのたじけなき御歌にて外に武きことのかく  
 まし内に敷きこどもかくませり人これをあらい奉り内外にわたりて残る所なくばよふ汚ぬ

たらん人へこと其心はへてさあつてやうあるべき「汚む名を耻てとしみて勇たたるよす

武雄の命をこむる「山行はむむすかばね海もかは水つゝかはねと云はもの、いと云ひ

へれたり桂巻もかしてき天照大御神の大御よそひ又息長足姫 大后のかしこきと業とうけ

たまはりてハ婦女ありとて事と時とにとりては武き心をふり起せん況てやますらをさうふ

名にも耻ぢらめやはおほまへの大御歌の尊き御すがたもて遙に軍人の御先に立坐るよまあ

りかくてこそよく國の内をしつめ給へれ必荒ふる人もおぢりしことていかでかけしきとを

を振まふべき

とつゝし久米の子らが垣本に推しはじかみくちひらく我の思すれど打てしやまむ

とつゝしくめの子らがめはふははかへら一本とねがもさおめつなごて打てしやまむ

御兄命のまことさびらいたやくしめはじて吾ハ日神の御子にして日に向ひて戦ふこと其は故

にやつこが痛手をなまおひける今よりはも行回りにて日を背あひてこそ撃てめとぢぢりてこ

とくゝに仇を討亡さむとし給ひし陰もあくとみに神靈まじたるが其悔しさに男建びましけ

ることハ地の名に残りて二千五百年の後に至りても孰か其うらみあかるべき況てそのかみ

目のあたり見とまはしし天皇の大御心にかばかりありんこの天皇後の世まで大御名もこ

とに高くましまし初羅知召て武く雄々しく坐るは古今にわたりて大方世にあらへ奉らん君

もあらひ奉らん臣もささぐさかりんこのまつゝし二御歌ハ御兄君の御仇を報い給

るは天下を平らげ給ふ御業を遂させ給んとするのたじけなき御歌にて外に武きことハかく

まし内に敷きことハもかくませり人これをあふひ奉り内外にわたりて残る所なくばよふ汚ぬ

功も立あんかし又かゝる御心深き大御歌あれば常によきうかへうたてき後世の外國風を  
ためたき事にこそ

をよめの床のべに我があきし劍のたちそのたうりや

しつ枝の枝のうらば、あり細ひ三重の子がとくがせるみの玉うきみ照してあはれあはれいひ  
みまごほろく、たこしもあやめかこし、高光日の御子ことのかたりごきもこそは

中途にして思ひ候むばうりはかあき者、あし願世幽世とて別に界のあるへくもあらす理の  
かはるべくあらすともたみあ神の御召ことをよく辨、あは命のかざりよなまたらんからに

常に志たる操を替へよや、ああるをよめの御歌によりて、こは命の御心の武く勇しくますこと  
知れて云ばかりをし末の世まで持ぬ功を立給へりしことあうへありと、いをかこししつ枝

は歌は采女が赤心以て常に仕へつ、も木れいの御盃にちりかわれるを知らざりしは畏き大

前あれば、さもありなんす、では切られあんとせし、特しはしの御ゆるめを請まをして、のゝる  
はき歌を露のといこほりなくよみ出たる、其才智の聰敏と其真心の屈折、あらは古今にためし

すくあき賢女とや、いはまし歳わかさころより、この歌どもとよくよみうかへしめば、大倭意固  
くして身に修る道もうとかし、すて上り國の爲に内、家のためいさたれもしき人とやなり

なんわがきもどちなふこたりそ  
うたのだからに、しきわあはる我が待やし、きはとやらすくは、一語のやるこなみが、魚のこは

たちそは、百貫のあけくをこきしひ、あねうはなりが、あなとばい、ちとあきみの大けくをこきだひ  
あね

みはしののむろがたけにし、ふそと誰ぞ大前まをす安見し、我大君のし、侍とあぐらに  
いまし白砂の袖きそあふたごむらにあむりきつきそのあむをあきつはやくひかくれごまに  
負じとそみづら倭の國とあきすしまとふ

志を迷ぬるばかり快きもひはなし初めひの檜原乃大宮の天皇のいみじく強き仇をうちとり  
給ひて軍人をぬきらひ給る時の御歌あり後のハ大長谷天皇のあきつといと忠あるを愛の盛  
りによみ給る御歌あり虫さへもかゝるを況てや人の徒にあすことあくて世を過さぬやは然  
れハ世に朽ぬ功を立あんには心を勵して事またへつ、年月を経て勤べし勤むること未しけ  
れば志を迷ぬとも快きこと少からんかしことに君父の爲國家の爲、勤て功たちあハ已獨の  
ことより其樂も幾層かいみしからんかし

にひばりつくばを過て幾よのねつる か、あべて夜には九夜日にはとをのを

うちひぬにぬいと知せばこのこも、持てこまじもの寐むと知せば

役にたち給て強き敵に向ひては晝夜御心を用お給る爲に御身け上のことなどは露も心よの

け給はず一方に教ければ一方よはうすきはうべきまぬかれがたきことなり御かたへ人によ

く心を注てよろづれちなくつかへまつるべきわざなり又時ならぬ事ある時は必ず打忘る、

事の多かる習ひなればさらぬとさより何かに必と用おるへきことなりこのはじめの御歌の

連乃句ハ倭建命にまめよ仕奉りし人けよめる歌にて之と以て其老人を譽て東國造にぞあし

給ひけるごありこの人の仕へ奉れるすへてのまよこの事にてもれしとかられぬかし支那人

なれば君は國の爲に日夜を忘れ臣は君を守て日月を數ふとやうららん



かしのふよよくすを造りよくすに醸し大御酒美らまきこしもちをせまらうがら  
なつ草れわひねの顔のかきわひにめしふますあわかしとどほれ

吉野の國主はりの地からとことみ并すなはにしてその心も敦きこと今世にしては東洋と西洋の  
なまもかくやあらんこの歌にても知らるゝありうの眞意まことのいともく傳つたはし後世にして  
賢術けんじゆつにたくまじと自らゆるさん人への浮薄うたへの流わりてそ乃汚名けがなを傳るが多かりかへりみさ  
もへかたざることをあり後れへ輕大郎女かろおとこははれに悲しき御歌にて御自の御上はたきて夫君はなのぢ  
は御上をおぼしめしけるは所謂權利を保つ説ことばをうらうへにて君に仕へ夫に仕るさまは自  
らの身を忘るゝばかりに至られば決きまめてその道の眞まことと得たりとひはれどくまじ  
久方の天あまれ香山かみやまとかまふさたるくひのほとたわやがひなをまかむとあわれはすれどさねじと

は我の思へどあがけせるれすびのすそに月立にけり

らはや人うちわたりにむたりせに立るあつとすまのみさからむと必かならずはもくしとあむと心  
はもへど本へは君を思ひで末へは妹を思ひでさらなけくそに思ひを悲しけくこゝに思ひで  
いふらすぞくる様ようすまひ

並ならふ様ばかり思はしきものへあし男女おとこの情こころばかり切きるあるえなをなははとかり給る御心  
はいと尊ぶとし凡世あまたあつ人は就もそれ心得あるべきとなり何事につまても心のまゝに様  
ふべからず古風いにしへのふうに則したがりて忽たちにすることなかれ後のハ宇通能和紀うとつねわき剛子たけこはかたじけなき御歌よ  
と人はかくこそめらまはしけれこの王のかゝる美うつくしき御心みこころにうへて弟王あにみをそこあひ給はん  
とさへし給る大山守命おほやまのりは御心みこころはいとくわしこし又これ弟王あにみは朱雀命すさけのりはなし給る御

事よわへすべし天下のこゝ私まぐ御留は早くし給ひつれど天境のかきりかゝやく御名の  
わに汚めやも天神の御手と助くる人あれば大御民よかずまへられたる人々いかに心ぞう  
ごかさいらん

いさあぎふるくまがいたて眉すばにほさりのあふみの海にわづさせなわ

やすみし、我大君のあうばし、し、のやみし、のうたき畏み我が道のぼりしものをのぼりの  
木のにだわせを

辱を願ざれば人の事を盡すこと能はず忍熊王乃これ時の思ひ立こそあしけれ今や御身のあ  
くなりあん時まで尙名と重んじ給ふ御意はおとろへさうけつし「もの、ふのとり傳へたる  
あすは弓かへるや本の柵かあるらんと吉川經家が今ハとなりてよみ出たるいといさぎよ

し後のは大長谷天皇よ仕へ奉りし舍人の歌なりかばかり狂くます天皇に近く侍ひし人にも  
似すよわき舍人にこそ臣たらん人は君け危きを見てわゝるさまふての幽世にての神たちの  
さらひ給ひ顯世にての朝廷の罪なひを免れす後世に長くきよなき名を残しなん大犬夫の雄  
心よふとたて、時あふぬこと俄に起りしとても少もたゆましとかねて靈乃御柱しすめあか  
まほしくころ

あかたまの緒さへ光れど白玉の君がよそひし尊くありけり  
あきつ鳥かもとく鳥にむかぬねし妹は忘れじよのことく

大后を偲び給ふ御意の實によのことくよませ給る大御意といひ天皇をしたひ給る御  
歌の眞情教ふこと譬ふへりきたるし御うらみのことありて別房にまし、すらくの如しこ

れとみて、よのちからひめしき人々いかにその徳を思ひよる人々又いかにそのことありとて  
人の後言するまでいさかひなんはいとよのらす「神代よりかくもりけらしうつくしみめぐ  
みこと、ふ妹を背の中と云るはいはれたり

やち戈れ神の命やあが大國主こそは男よいませばうちみる島のささぐかきみる磯ののさき  
ねらずわか草れすまもたせらめあはもよめにしめればなぞとてそはあしめをきてすまひあし  
云々

さねさしとかわむねをぬにもゆる火のはあかにたちて問し君はも  
婦の夫に仕るさまの操正まきより先あるはなし須勢理昆買命の歌詞の美はしきこれ御言  
よ天地のあらん限りうとくべからざる道のけりになん大凡よの治るも亂るも一家より起

れり一家一身に治るも内を正く守るによれば女教の正きわが皇神の道のいとく尊くなん  
天地に共君臣に道の亂れぬも故ありけり後の歌は弟橘比賣命の夫君にかはり給る時け歌よ  
てそれ武く雄々しきと大丈夫も及ばじ志うする人もこれを聞ては黙あるべきや人の心を感じ  
かして道をかたくとらしむこゝを思へば後世に功たちぬることハ夫の君ふもをさくをど  
り給はじと云ふよし

みあそ、く臣のととめほたりとらすもほたりとりかたく取せ下がたくやがたくとらせほたり  
とらすこ  
やすみし、とが大君の朝戸にひよとた、し夕とくひよりだ、すわさづきがしたの板よも  
がむせと

に仕奉るには赤き清き心もちてすへきは云までもなし前の天皇の内侍賜へるに後  
 の内侍の歌ありことに婦女はその志操まことにかくひ如くならざるべからず婦の夫に仕  
 女子の父兄に仕るもまたかくあらまほし内政に預ることなれば婦女は謹み深きところ尊  
 きまじなれ

たまふべし吹わけて雲はなれそきそりともわれわすれぬや  
 しろゆらしけ鳥山いしけしけあがのしづまにらしきあはむかも

婦の夫を思ふ心の際うるべきの云までもなければと夫の婦を思ふことも等しからまし然れど  
 この心をただ其時に過しきするを云るに非ず又この愚媛の歌「倭へに行はたが夫とも  
 この下へのつゝ行はたがつまどあり女はことになたみ深きあらひあるにさることあ

これはせるばかり辱く後の大長谷天皇の御歌は雄略といはせるばかりの御性あれど大后の  
 御歌かく速にうけひき給るは畏れれど事に聰敏さ君にませとあるべしなりしこ  
 になれわかくるすばら若くべにぬねてましもれ老にけるかも

の江の入江のちす花れちすみのさかり人ともしきるかも

父のあからひよつきては更あり人と考たるをわたり悲きあし赤猪子が正き心もちて八十  
 年の間詔待ちけるがつひに事ならでかく止しし身の限りのうらみにこそ天皇もいかばか  
 かの入れにおぼしけん故この時大御言に吾は既に先の事を忘れたり然るに汝守志に命  
 命て徒に身の盛をすべしこといとほきどのり給ひて御歌を賜ひ多し物賜ひさきみにた

「たまふべし吹わけて雲はなれそきそりともわれわすれぬや」  
 「しろゆらしけ鳥山いしけしけあがのしづまにらしきあはむかも」  
 「婦の夫を思ふ心の際うるべきの云までもなければと夫の婦を思ふことも等しからまし然れど」  
 「この心をただ其時に過しきするを云るに非ず又この愚媛の歌」  
 「倭へに行はたが夫ともこの下へのつゝ行はたがつまどあり女はことになたみ深きあらひあるにさることあ」  
 「これはせるばかり辱く後の大長谷天皇の御歌は雄略といはせるばかりの御性あれど大后の」  
 「御歌かく速にうけひき給るは畏れれど事に聰敏さ君にませとあるべしなりしこ」  
 「になれわかくるすばら若くべにぬねてましもれ老にけるかも」  
 「の江の入江のちす花れちすみのさかり人ともしきるかも」  
 「父のあからひよつきては更あり人と考たるをわたり悲きあし赤猪子が正き心もちて八十」  
 「年の間詔待ちけるがつひに事ならでかく止しし身の限りのうらみにこそ天皇もいかばか」  
 「かの入れにおぼしけん故この時大御言に吾は既に先の事を忘れたり然るに汝守志に命」  
 「命て徒に身の盛をすべしこといとほきどのり給ひて御歌を賜ひ多し物賜ひさきみにた」

くただひとへに天皇としたひ奉る意いとめたじけなし後ひ御歌の難波天皇その大后の御う  
 らみのことありて山背にさけ給へりときこしめして御使を遣せし時の大御歌にていとく  
 教き大御心のはど知られて身よしむばかり尊し奉ふ怒を起し親と破りあんはかへすぐお  
 かしからすとかく危きことをしひてせざるこそいとあらまほしきことあれ

山かゝに詩る青あもきび人とともにしつめは樂くもあるか

いくみ竹いくみの寐すたしみ竹たしにはおねき後もくみねむそのおもひづまあれ

世に心あへる人と共に事をなすばかり樂きものはあし然れの初めよりよく撰びて事に就く  
 べくこそはじりつすこの速ひも後にの大きあむやまらとやなりあん又よき人はよき言  
 といひよきことよ従ふこと水たひきよに従ふが如し初の難波天皇の御歌の御名よとへ仁徳

歌も亦ほ「みもろよつくや玉垣つきあましたにかもよらむ神の宮人となり實は身のさか  
 人としきろかもよめるごとくわくありての心よやるかたなかりけん身れさかりと徒に  
 過しすれどもその志操は高きことばひまらやの頂にも並びをん後の世までもに汚れやもか  
 にかくと身のつらさを歎くべくもあらず守る所さへ固ければ其報いらぬであかるふこと  
 を思へば神のます世のいと樂きものにぞありける

君が行けながくなりぬ山たづのむかへを行む侍にはまだし

まよひあすめかみふ妹鏡をすあがもふつまわりと云ばこそ家よも行ぬ國ともしなばめ

命長ければ辛少なく金銀ととなればまた外に關たることありてとこかくよ人はともいへ自  
 ぶ身を足れりといふものはあからんかし輕太子と輕大郎女は御はらからよまして御身は天

下を知召すへき儲にまじ御才といひ御姿といひかくばかり足らぬとあり御方はかしこけ  
と古今よをさく少あからん然れども道ならぬ相思ひまじけるによとてあたらさかき  
性にまじあがら天下後世に功とてハ立給ひざりしといともく口をしきことなりかし御  
美しきがかべりて御身は災を醸しけりこれ二柱は御歌これ外にもあまたあり「あしひ  
の山田を作り山高みしたびをわしせ下問にわかとふ妹を下哭に我があく妻をこそころは  
少くはだふれ又」と、ばにうつやあられたるにぐにぬねてん後は人計ゆともうるはしと  
さねしとねてを新こもの亂はみぐれとねしとねてば「天とふ鳥も使ぞたづねね聞はん時  
はわが名問さね」大君を鳥ふはぶらハ松あまりの踊りこむぞわかたみゆめこところた  
みと云わがつまはゆめみあく其調は高きこと柿本山邊に二翁もいかで立ちぬきん千と

せむ後に生れたる人も猶こそをまじまぢらめや道に悖り給はざりせば御中らひのことよ美は  
まきは後世の範にもあたましをたつ方向を違へ給へることのいとくをまじことなりと  
とばれ御うたをみるに世乃誇御身の幸をも願み給はざるさまにて亂の末ばかりはあさも  
のはあし

とば國のまほろばたあつく青垣山こもれる候しうるばし

宮人のあもひれをすいあちにきとみや人とよむ里人もゆり

よそ身を思ひ國を思ふ心ばかり切あるハなし況て遠き國邊に立たらんハ一しは深かる  
くこそ御悟道と云ふ歌にてつゝのる手風つたあつこと云るはいかにかぞや後世ハ皇子  
のあまりよ建びはやり給るにゆりてよめる歌にてすこのことを貴人の御心とし給へり里

人はゆめあさむぎとぞ云るなり時にとりてはかゝる心しらびも必ずあるべき事にてそ國の  
爲にはかり身の爲にのかる人事の上にかゝればなり

さお川よ雲たちわたりうねび山このはとやぎぬ風吹むとす

うねび山ひるの雲とぬ夕されば風吹むとぞ木のはとやげり

まだきにそひねのあらはるゝは神のくすしきちひになんそのこゝろをば何とぞたもつて

災にかゝらむはらとほのめし風雨暑寒のかはりも俄み然るにはあらじ必ず入るべきとほこそ

ら人もかゝる心ばへと云りま

あまちのらきたにをすつて百傳いぬてゆらぐもあまめくらしき

あまめもやあみけらあめすよはみやあまのくりにて見ゆすつてあらむ

功あるもれと愛み給ふつともある入まこととて言までもあまが如くなれどか入りて思入は

功の臣たるもの・立入の道にて後り給はどもありぬへし親みまめある入まは子たるもの

道なればあを別と實をやのぞむ入まこの二つの大御歌はかしこも天皇のめでのさつりよよ

ませ給るよてあまめの名もさみの御めでと共に世に長く傳へけり人の重みすべきの志業正

あまこすものあまじにし

倭のこのゆげちにてたふる市の司たひなへやにおひ立るはひろもつまつぶきそがはのひろり

いまし其花の照います高光る日ひ御子皇御酒たてまつらせ

も、しきの大宮入くうづらとくひれとてかけてまなぶしらすあまめ入にのすつめうす、あま

ひてけふもかまかみづくら高光る日の御子

一、本館は、新聞紙の發行に當り、その内容が、  
 國家の利益に資するものなることを第一とし、  
 社會の公衆の利益に資するものなることを第二とし、  
 個人の私利私欲に資するものなることを第三とし、  
 以上を以て、その編輯の方針とす。



版權登錄

著者

山口縣士族

藤

井稜威

印刷兼發行者

西

廣島區大手町五丁目

印刷所

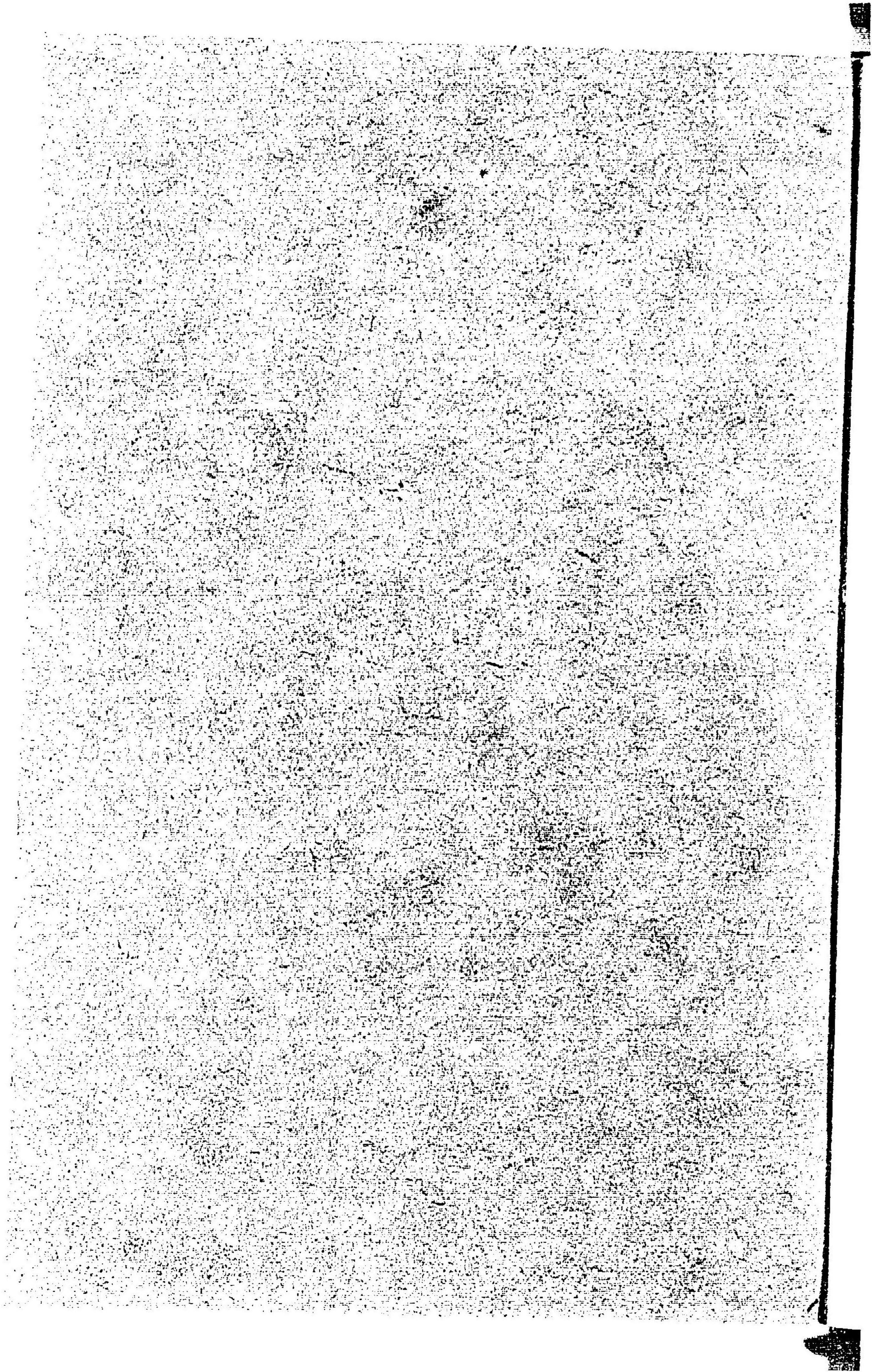
活

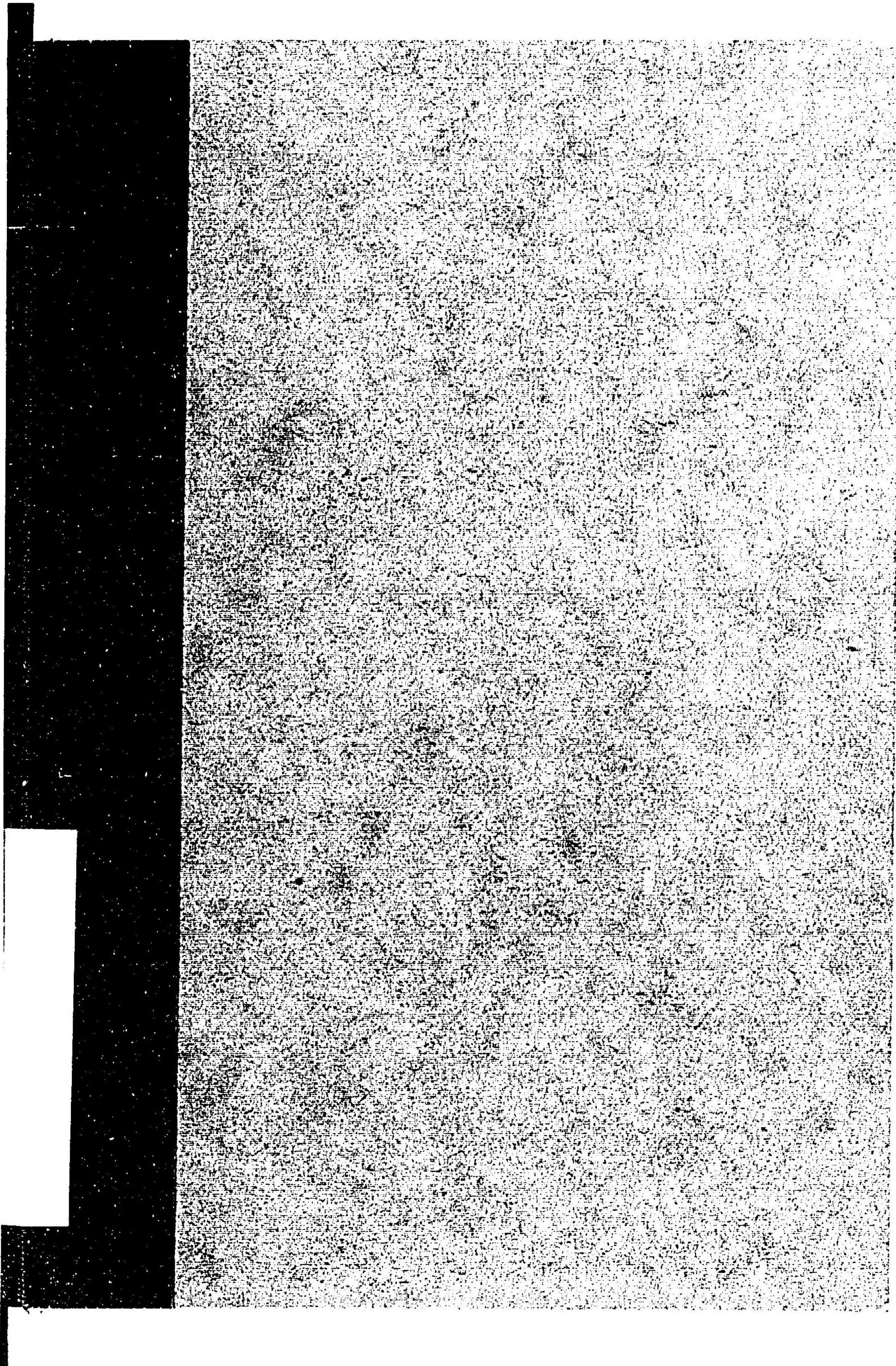
廣島區小町第百十九番

同區袋町三番地

定價金三圓

明治廿一年四月二十日出版御届  
明治二十一年四月二十日印刷





特5 1

535

みくにふり歌あわせ

一の巻

国立国会図書館

086633-000-4

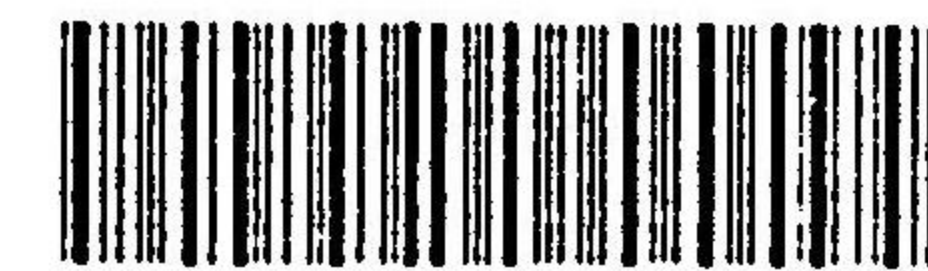
特51-535

みくにふり歌あはせ 1の巻

藤井 稜威/著

M21

DBD-1777



特5 1

535

みくにどり 歌あわせ

一の巻

国立国会図書館

